

キリスト教主義教育と「宗教学」

幸 日 出 男

姿勢がなければ、キリスト教主義について論ぜられないのではないであろうか。

キリスト教主義教育について論ぜよという。しかし、キリスト教主義とは、一体全体何であろうか。イエスは、「貧しいものは幸福である」「地上に宝をたくわえてはならない」「天に宝をたくわえなさい」といわれた。だが、かなりの宝を地上にたくわえていないとなかなか学費も払えないというのが、同志社大学の現実である。しかも、この学校は、キリスト教主義の看板をかかっているという。この看板と現実はどうかかわるのであるか。授業料の額とキリスト教主義との間には何の関係もないのであろうか。

もちろん、教職員の増員も必要、昇給も必要、そのために今のところ頼るは、ほとんど学費のみというのも事実である。きれいごとをいうつもりはない。しかし、これは一例にすぎぬが、こういう現実の問題に痛みをおぼえ、矛盾の中で苦しみながら考えようという

編集部から来た執筆依頼状を読みかえしてみる。直接教育をご担当いただいている先生方に、同志社におけるキリスト教主義教育の「実状」「悩み」をご報告いただき、将来への「期待」を論じていただきたく……とある。この直接ということばがどうも気になる。大学の全体状況は見なくてよいから、直接教育のことを論ぜよという気持とも受けとれる。とにかく、「宗教学」のことを論ぜよということであろう。しかし、まずキリスト教主義というのは、何よりも学校全体にかかわるといふことを強調したい。万一にも「宗教学」が、あまりにもキリスト教主義からほど遠い大学の現実を、ちよつぱり宗教の話をするこゝによって糊塗するようなものであつてはならないのである。

「宗教学」の授業の中で必ず新島襄のことを教えてほしいという

要望をよく聞く。もし、創立者の精神を論じて、現実とのずれを語るのであればともかく、まるで、創立者の精神が現実を貫徹しているかのような話をして、母校愛を養おうというような魂胆はもちたかないものである。第一、墓の中の新島自身が、自分のことをいつも後生大事に語られるのをぞんでいるであろうか。すぐれた創立者を持ちえたことは、同志社の誇りにちがいないが、それをかっつき廻っているがたは、あまりほめたものではない。折りにふれては新島のことを語るようにつとめたいが、新島のことをいつも語らねば、同志社の「宗教学」でないというようなケチな考えは捨てた方がいいであろう。

二

さて、とにかく、「宗教学」の様子を事務的に報告することからはじめよう。現在、大学では、入学して、第一年次に、一般教育科目の一つとして「宗教学」を週一回、一年間履修する。数年前までは、全学生必修であったが、現在は、経済学部と商学部は、自由選択になっている。一・二部あわせて二十のクラスにわけ（一部の場合で一クラス平均三百名くらい）、これを数人で担当する。宗教学専任担当者は、四ないし五クラス受けもつ。講義の目標と趣旨については、学生に配布している「履修要項」に記載してある文章をそのまま引用しておこう。

「一般教育において宗教を学として学ぶ意図は、単に文化現象、社会現象、心理現象としての宗教を対象的に把握することにあり、従って専門科目としての宗教学に対する序説や

入門あるいは概論を志すものでもない。

宗教は本来、人間の最も根本的な生き方にかかわるものであり、人間の生を、あくまで全体として、また根源的に問う立場である。このような宗教に対する主体的な関心と情熱を喚起するために、宗教に対する誤解の除去と宗教の本質に対する正当な理解が遂行されるのである。

また宗教の立場よりする人間性の解明は、現代人の疏外とよばれる今日における人間存在の危機を克服する方向の探究でもある。そしてかかる意味をもった宗教学は、本学におけるキリスト教主義教育の基礎たらんことを念願するものである。」

これは、担当者間の相談でまとめた文章であるが、具体的な各担当者の授業の内容は、かなりのバラエティをもっている。参考までに本年度の講義テーマをあげておこう。（ただし最後の二つは、二人の担当者による組合せ授業）

現代人の疏外と宗教（キリスト教）

宗教批判論の系譜

キリスト教思想とその批判的受容

キリスト教と近代の欧米思想

宗教の意味

宗教と現代社会（前期）―新約聖書の思想（後期）

近代日本のキリスト教（前期）―近代思想とキリスト教（後期）

このほかに、昨年度から総合科目という制度がもうけられたが、「宗教学」を必修としている学部では、宗教関連科目として指定された総合科目を履修して、必修の「宗教学」にかえることもできる

ことにした。

三

以上、実状を簡単に報告したが、つぎに、いろいろな問題にふれ、「悩み」や「期待」を語ることにしよう。

まず、授業の形態について。

さきほど学費が高いといったが、これほど高い学費でも、それを払って入学する人が、これほどたくさんいるということは、おどろきであり、正直にいった方がいいことといわねばならないが、その結果として、受講者の顔も名前もほとんどおぼえることのないマスプロ授業をやらされることは、教師にとってわびしいとだけいってすむことではない。これは「宗教学」だけに限らぬことであるが、何百名ものクラスで、マイクの授業をして、教育の目的が果たされるのであろうか。特に「宗教学」専任担当者の場合、毎週同じ講義を四度か五度くりかえすわけで、肉体的消耗は奉仕的精神でカバーするとしても、こういう大教室でのリピート講義でも、キリスト教主義教育といつてよいのであろうか。

この改善策としては、クラスの細分化と担当者の増員をだれでもすぐに頭に浮かべるであろうが、ぶちあたるものは、予算の壁というようになっていく。しかし実をいうと、問題は予算の壁というよりも意識の壁なのである。口先では美しい大学論を語っても、一般教育はマスプロでやれると思いきや、大学関係者の頑固な意識を打ち破らないかぎり、改革はおぼつかないであろう。

四

つぎに授業の内容のことを考えてみよう。名は体をあらわすというが、学科目のタイトルが「宗教学」となっていることについて、他の多くのキリスト教主義大学のように、「キリスト教学」とか「キリスト教概論」などとしたらどうかという意見をときどき聞く。しかし、現在の学生の状況を考えるとき、「宗教学」というタイトルには積極的な意味があるといつてよいのではないであろうか。マスプロの教室で、宗教にあまり直接的な関心をもっていないような学生たちに、ある特定宗教の教理を祖述するなどということは、単に学生の心理的反撥を買うというだけでなく、実際にほとんど無意味に近いことである。やはり、人間の問題から出発し、人間の問題に帰ってくるのでなければならぬ。「人間の生をあくまで全体として、また根源的に問う」ということがなければならぬ。一生に一度、一年間だけキリスト教の説明を聞いて、それですむことではない。各人が、むしろこの講義を出発点として、自らすすんで自分の宗教を求めものとなってほしい。そのために講義は、積極的の何かを与えるというよりも、まず消極的に「宗教に対する誤解の除去」をはかるものである。また、今日、キリスト教は、他宗教やさまざまな思想と対話し、そのもつ真理契機を学び、偏見を捨てた誠意ある対決によって、自らの独自性をあきらかにすべきであろう。他の諸宗教・諸思想との関連をぬきにしてキリスト教だけを説明しても、それは有機性のない百科全書の知識を与えるにとどまるであろう。学生たちは直接的には、宗教に無知・無関心のように

見えるけれども、日本の長い宗教的伝統と精神風土の上に育ち、生きていたのであり、そのような伝統や風土の自己理解を深めることによって、「宗教に関する主体的な関心と情熱を喚起」されるにちがいない。

五

近年、「宗教学」の多様化ということへの要望が非常に強くなってきた。実際は以前から教人の担当者が、各自の持ち味を生かしつつ、かなりバラエティのある講義をしているのであるが、問題は、これだけ多様な講義がなされているのに、学生の方は、クラスが事務的・機械的にわりあてられるというところにある。講義の多様性を、学生たちの興味関心の多様性とかみ合わせて、自分の希望する講義をきけるようにするということが、すなわち、選択必修制の採用が今後の課題である。（誤解をさけるために自由選択制との相違を明確にしておきたい。後者は、宗教学を履修してもしなくても自由ということであり、選択必修制は、必ず履修するのだが、ただどの担当者の講義をとるかを学生が選択できるということである。）現在の組織制度の下では、時間割編成という技術的にむずかしい問題があった、一朝一夕にはゆかぬであろうが、関係者の協力を要望したい。

ただ、このような理想はよいが、実際には多くの学生の選択は、講義のテーマや内容によらず、きわめて非学問的な理由・動機によるというつめたい観察も有力である。もしこれが事実とすると、せつかく苦勞して選択必修制にしても、あまり意味がないのではない

かということになる。しかし、選択の機会を与えれば、学生の意識も高まってゆくのではないであろうか。

六

昨年度から総合科目が開設され、その中に宗教関連科目がおかれていることは、すでにのべたが、この科目は選択制であり、前述の多様化を一步実現したものとすることができる。現在宗教関連科目として開講されているのは、「日本の近代化とキリスト教」と「現代社会と宗教」の二つであるが、漸次ふやしたいと思っている。これは、宗教学担当者のほかに、いろんな分野の人たちの協力をえて行われるもので、「現代社会と宗教」の場合を例にとると、宗教学担当者のほかに、文化史・政治史・経済学のスタッフが加わっている。総合科目は、まだ実験的段階にあり、テーマの設定、担当者の人選交渉、授業計画の作成など、経験の少ないためもあって、いろいろ問題がある。教人の担当者がそれぞれ勝手なことをしゃべっていたのでは総合にならない。するどい相互研鑽と綿密な打ち合わせがあつて、はじめて科目としての調和統合が可能である。これは言うは易くして、実行はまことにむずかしい。筆者も「現代社会と宗教」のまとめ役をうけもつてこのことを痛感している。しかし、この科目の開講によって、とぼとぼではあつても、宗教の問題について、専門領域をこえた対話・共同研究がすすめられるようになると思えば、まことによろこばしいことである。考えてみれば、キリスト教主義の大学といっても、教師の間に、宗教について各自の学問との関係において語られるということが、これまであまりなかつ

た。学問はそれぞれ独立しむる孤立して、ただ漠然とキリスト教主義ということばが、同志社を統合していたといつてよいであろう。学問することの意味、学問するものの主体性は、近年特にきびしく問われたが、もしキリスト教主義ということが本当に同志社の生命であるべきならば、そこにつらなるものは、一人一人自分の学問とキリスト教主義との関係を、真剣に問わなければならぬであらう。

七

以上のべたような宗教関連総合科目の増設、選択必修制の採用などが制度的な面からの「宗教学」改革の方向ではないかと思うが、その歩みを待ちきれず、とにかく、「宗教学」の必修をはずしたいという声が起こっているようである。すでに二つの学部で必修をはずしたことはすでに言及したが、その際、一つの学部では、制度として必修ではなくても、選択を積極的に奨励するという方針をたてられた。必修をはずす限りは、その方針を今後とも堅持されるよう

希望してやまないが、それにしても、できることなら大学全体として統一な方向ですすみたいものである。昭和四十六年十二月二十三日の大学評議会で、 \wedge 「宗教学」は原則として必修 \vee という決議がなされたのも、そういう趣旨からだと思う。「宗教学」の必修制がくずれば同志社大学のキリスト教主義がくずれてしまうかのようには思いつめることもないと思うが、しかし、何でも自由化はよいことだというような安易な議論はつつしんでもらいたいと思う。幸いにして、これまでに出版している必修否定論は、むしろ積極的にキリスト教主義教育をすすめるためという動機に裏打ちされているものが多いようで、そういう動機を建設的にうけとめてゆきたいと思う。逆説的にいえば、今日は、大学の中にキリスト教主義が稀薄化しているからこそ、最後の歯どめとして、せめて「宗教学」一科目くらいは必修ということになるので、もし、キリスト教主義が大学全体に貫徹しておれば、別に必修の「宗教学」はなくてもよいということもいえるのではないであらうか。(大学神学部教授・宗教学)



キリスト教と同志社の体質

——現場教師の行きづまり——

杉 瀬 祐

一、新島精神？

新島襄の同志社設立の精神とキリスト教との関係、キリスト教をもって徳育の基本とするということの意味、この最も根本的なことが同志社として明確にされていないし、同志社の教職員の間においてかなりまちまちに理解されているように、私には思われて仕方がないのである。そしてこの不明確さが、キリスト教関係の教科担当者、キリスト教教育に直接関係している者にとって、最も大きな障碍になっているのではないかと思われるのである。

一、新島襄が、ニュージーランドでの留学体験と見聞を主にしてビュリタンのな市民社会の形成の必要を痛感し、それを日本の近代化の目標として設定し、それとの関連において同志社の学校教育の使命を見ていたことは、ほぼ間違いない推定ではなからうか。

もしそうだとすると、その後の日本の近代化は新島が希望し予測

していたようには進まず、むしろ反対の方向に進んだわけで、今日われわれは今一度「現代における市民社会」の問題を改めて問い直し、そこから再び新島の同志社創立の理念を考え直してみなければならぬであろう。

二、新島襄が封建的体制に対して個人の自主独立を主張し、立身出世主義のための踏台としての（官学的）学校教育に対して人民のために奉仕献身する人材育成の同志社教育を主張したことも、一般に承認される点であろう。個人の独立自主の主張は、慶応の福沢諭吉においても見られるところであるが、福沢がいわゆる実学の精神を主張して経験主義的な、そして世俗的現実面において発展して行ったのに対して、新島の近代的個人は、宗教的（福音的）であり、理想主義的であったといわねばならない。そこに新島の目指した近代人の理念や個人の質の問題が改めて問われねばならないであろう。（私は女子大学発行「学生生活のしおり」中の拙文「同志社と

キリスト教の精神」に於て M. Buber の「わゆる hauslich な思想家と Hauslos 的思想家の対比として福沢と新島の差をとらえ、新島先生の人間理解こそ今後の日本文化・社会において真に建設的な創造的な意味を担うものであることを考えてみたいと思つたのであるが、同志社教育の目指す人間像について多くの方々から教えていただいたと希つている」

三、新島襄は学校と教会との自治連帯を考えた。新島が時として長い間学校から離れて伝道旅行をしたことは、アメリカン・ボードの宣教師という肩書や給与のためばかりではなかつた。たしかに伝道旅行は反面において同志社進学希望の有為の青年を募ることもあつた。だが新島自身の中に福音宣教の熱誠と現実的な緊迫感があつた。新島の目指す同志社教育は福音信仰なくしては達成できぬものであつたからである。同志社のもつ「不幸な二重性」（和田洋一「新島襄」参照）のゆえに、かなり多くの誤解や異見が今日でも残つていふと思う。特に、そのことは、同志社（学校）と教会との関係について著しいと思う。新島先生は学校と教会を別の組織とされ、それぞれ自由自治であるべきと考えられたが、決して無関係とは考えられなかつた。本質的にこの二つの組織は内実的に密接に結合連帯していなければならなかつた。私は同志社のエートスは常に教会のエートスを必要としていふと思う。もちろん、両者の直結ではない。新島襄がミッジョン・ボード直轄の学校でなく、自治の学校組織を主張したのもそのためである。「不幸な二重性」について、今日改めて統一の見解ないしは同志社全体の腹藏ない話し合いを試みては良いのではなからうか。

二、象徴としての学内礼拝

私は、学校における礼拝は大切だと思つている。女子大では種々の困難の中で毎日短い時間ではあるが学内礼拝が守られている。

学内礼拝については常にいろいろの声がある。私が宗教主任をしていた頃も放送礼拝はどうかと、週一回にまとめて本格的に長い（時間の）礼拝にした方がよくないかとかの意見があつた。しかし、他校で試みた結果、最初の二、三年は好い方の結果のみが報告されていたが、やがて行き詰りの種々の問題があいついで起こつて困惑しているケースが多い。単に慎重であるとか保守的であるということではなく、「歩みつつ、考える」ことが大切だと思つのである。「考えるために放棄中止する」のは口実的に安易であるが、礼拝は精神的、生活、である限り、生きつつ、歩みつつ、模索せざるを得ないであらう。また、礼拝が人格的行為であるならば、放送礼拝は最も中心的なものを喪つていふといわねばならない。

さらに、学内礼拝は、神の前に教職員も学生も平等に一箇の人間として立たしめられる場である。そこには学長も後輩も老若男女の区別はない。キリスト教主義の学校といえども、この世における組織として存在する限り、いつの間にか組織や機構は定着し規範化する。それは当然のことであり、この世の常である。だがしかし、そうなつてしまえばキリスト教主義ということには有名無実化し、キリスト教は学生鎮撫の手段となつたり、看板だけの偽善的なものに墮してしまふであらう。この世にありながら常にこの世を破り超えるもの、組織に基づきながら常に根底的に組織をすてるもの、そう

した否定的、契機を常に生き生きと保ち続けようところにキリスト教主義学校の本質があるであらう。学内礼拝はかかる学校の本質の象徴的行為であるともいえる。学内礼拝を真実に守り続けることは、学校の根源的腐敗を防ぐ唯一の、そして本質的なわざといえるであらう。この意味でキリスト教主義学校の活力は礼拝にあり、その刷新は礼拝から始まるというべきであらう。

キリスト教教育とは、単に礼拝の時間があるとか、聖書や宗教学の科目があるということではない。学校の組織運営全般がキリスト教的であるかどうか、もつと具体的にいえば前述のごとく常に生きた否定的契機を内に保ち続けているかどうか、現実的に一人の学生の人格や魂、その教育的育成に真実に情熱と努力を傾け続けているか、が問われねばならないであらう。こうした土台なくしては礼拝や宗教科目は虚しいものとなってしまふ。

三、組織と体質

現実には理窟通りにはゆかぬいろいろな問題があることはいうまでもない。私も重々そのことは理解しているつもりである。だが、同志社がキリスト教精神を根幹とする限り、私どもは問題を回避することは許されないであらう。そしてこの事がらは皆で負うべき重荷でもある。そこにこそ教育共同体としての同志社のユニークな特質があり、使命と課題があるといわねばならない。

大学あるいは学校としての学問的普遍性の上にキリスト教主義という特殊性を附加した同志社という概念では、同志社のこの使命と重荷は十分に担うことはできない。普遍性プラス特殊性という把え

方は浅薄な把握であるように思われる。現象学的に同志社は二重の緊張関係(学校—信仰、官立—私立)を内実としてもつ教育共同体として存在している。そしてこの教育共同体を守り育ててゆくことは全同志社の責任なのである。ところが今日そうした教育共同体は崩壊ないし変質させられつつある。それはマスプロとか世俗化とか一口にいわれ易いが、実際には組織や機構による体質変化ではなからうか。更には、我々自身のエトスの緊張の放棄断念ではなからうか。同志社は、現在いわばみずからキリスト教主義を放棄し、教育共同体を崩壊させているように私には思われてならないのである。外部的圧力や趨勢を口実に前に、私どもは今一度謙虚かつ冷静に内実を分析して検討すべきではなからうか。特に管理職の責任ある立場に立つ者は、深い洞察をもって慎重に考えていただきたいし、全同志社の問題として皆で考える態勢を作っていたいただきたいと希うのである。そのことなくしては、キリスト教教育が現実化してゆく場が無くなってしまふであらう。

その他、実際問題としては幾多の疑問や障碍があるけれども、ここには日頃感じている基本的なことだけを、悩みとして、また期待として記させていただきます。同志社創立百年には事業や建物以前に、こうした建学の基本理念の一大検討を期待したいのです。

(女子大学教授・聖書)



同志社のキリスト教主義教育の起点

津田能人

一
私のような者に、たいへん難しい課題が与えられ、問題が問題だけに、どの程度、述べることができるかまことに心配であります。ただ、感ずることを述べて、自分なりの反省にもしたいと思ふ。

高校においては、礼拝はもちろん、毎日行われている。しかし、この礼拝については、いろいろ難しい問題がからんでいる。これには学校全体のかまてもそうであるが、生徒側からも不満といったものが毎年出てくる。つまり、あんな騒がしい礼拝で、学校はどのようになっているのか。また、ある者は、なぜ、礼拝を強制するのか。先生方の話がおもしろくない。高校生活の縮図のような形でいろいろの問題が出されてきた。また、教師の立場から言うと、「礼拝」というその場に入り込む生徒たちの姿勢がまるでなっていない、言っただろうか。たとえば、聖書、讃美歌を持ってチャペルに入る者は少ない。また、話をなされる先生にもよるのですが、先生

の話をお聴こうとする姿勢が生徒たちにはない。岩倉の礼拝のお話にいられた先生方は、この騒然たる礼拝に出られてびっくりしておられる。まことに恥ずかしい限りであります。これは、やはり私自身もその一人でぎんげをしなければならぬが、生徒たちが指摘するようには、学校の姿勢、また教師たちの姿勢にかかわってくる非常に大切な問題であろう。実は、現在専任のキリスト教信徒の先生の数が六名しか居ないところで、一体、どうしてキリスト教主義教育の学校と言えるだろうか。たしかに、人数だけが問題ではありません。他の先生方の協力は十分いただいて居ります。しかし、勝手なことを書かせていただくと、一千名以上の生徒をどのようにしようとも余りにひどすぎます。先ほども書きましたが他の先生方の協力ももちろん仰いでおり、それなくしては、なかなかできませんが、やはり、いざという時に、人教的な面で、遠慮というのか、ストレートに言えない苦しみを感じざるを得ない毎日です。それはともかく、教職員と生徒が、この同志社に集まっているのですから、特に全生徒が出席するたてまえ上、私たち教師たちもその方向に向かうべく

姿勢を正す必要はあるのではないかと思えます。

どうも最初からまずかった。私がお世話になっているのは、この同志社高校であった。しかしこのようなグチを言っても仕方があるまい。今や、日々の礼拝プログラムを精一杯突り多いものになるように努力することであろう。

このように大へん悲観的なことを書きましたが、しかし、生徒の中には、この礼拝の時をしっかりと受け止めようとしていることは確かである。一方ではこのような生徒を大切にしないといけないと思うが、一向にこちらの方に向けてくれない生徒たちとの間に大きな隔たりがあり、学校での宗教教育の難かしさを痛感する。この原因になるものには、やはり、チャペルの中に、千人近く入れて行う礼拝の物理的な無理があるのではないか。最近の教会など見ていると、若い高校生や大学生は教会に来ないと言う。また、教会紛争の時ににおいても、若い人たちの言った中には、礼拝そのものを形骸化されたものと言っていたこともあった。礼拝の型がいつも決った型で誰かが何やら喋ってお祈りして終る。しかも毎日、色々、異なった先生が各々思い思いの事をお話しなさる。讚美礼拝がたまにあったとしても生徒は、何百回と聴かされる。これではテレビのコマーシャルのようなもので、お話も一つの情報にしかすぎない。確かにこうなると現代っ子のドライな感覚で礼拝に出ているだけになっってしまう。しかし宗教教育となると、どうしても「何故？」とか「どうして？」という問が必ず出てこなければならぬ。それがこの礼拝の繰り返しては出てこないし、千人と一人とはいくらマイ

クの良いのを付けても生徒からの「response」が返ってこない。若い人たちが求めているのはそういった「ふれ合い」のようなものではないか。

「宗教週間」という期間を春と秋に持ち、特別に講師を迎えている。これは同志社中高がいつしよになって計画されているものであるが、遠方より先生が来ていただけのこと等、良い点は数々あるのですが、講師の先生にとっては余り評判は良くない。今年の春に來られた先生などは、なかなか手厳しい。「一体、私に何をしゃべれと言うのですか。たった二十分ぐらいで。私は少なくとも四時間ないと話して来た意味がない。」と。彼の主張は四時間しゃべりまくるといふのではなく、生徒との反応をききながら話を発展していくということだった。このようになるとおよそ礼拝の話には困る訳けであるが、修養会等にはもちろんこのような形はとれると思いがら、私は今の高校生が何を求めているのだろうかと思つた。果たして今までの礼拝の形で良いのだろうか。二十分弱の濃縮されたお話をこのまま毎日続けていくだけで良いのだろうか。私は朝の礼拝という時間を持つだけで何か隠れ糞(みの)にでも隠れてしまっているキリスト教学校の弱さを感じる。もちろん、礼拝をやめると言っているのではない。それから脱し得ないもの、それで安心してしまっているものに腹立たしいものを感じるのである。しかしイエスの言葉のように「わたしのしていることは今あなたにはわからないが、後でわかるようになるだろう」(ヨハネ十三章七節)。その望みだけを続けて、日々の礼拝を持っていくべきであろうか。

二

生徒の宗教活動といえは宗教部がある。現在二十六名の部員が居り、自主的な活動をしている。春、秋の修養会のテーマ、プログラム等の準備、また当日の運営などを良くしてくれる。花の日やクリスマス礼拝の手伝いや、止揚学園や病院等にも訪れる。良き働きの中にあり、校内でのじみちな発展が期待される。本校の宗教活動においては全教職員が負うことになっており、礼拝においても、ノン・クリスチャンの先生方にもお話をさせていただき、出席していただいている。修養会に、職員の方の参加もある。生徒の方にも時々お話を頼むこともある。また、讚美礼拝(毎週土曜日)には、聖歌隊が毎回奉仕してくれる。ホザナ・コーラスであるが、創立当時は聖歌隊であったが、コンサート・クワイヤとなって幅広く活躍している。毎回の讚美礼拝の奉仕には我々は頭の下がる思いである。また、毎日の礼拝の「レスポンス」(応唱)の讚美歌を欠かしたことがない。クラブとしては、歌でもって近江のサナトリウムとか、病院の慰問、市内の教会での讚美礼拝、クリスマスには、キャロリングをしたりで、とても忙しいスケジュールで活躍している。その他、多くの演奏会など……。

三

現状||悩みのようになってしまふ今日、将来の期待とは、現状の解決をすることから始めなければならぬ。同志社は、もうすぐ、百年を迎えようとしている。校祖新島先生は同志社設立に当たって

何を目指し、何を心配しておられたのであろうか。

学校のカリキュラムは一分のすきもなく、びっしりつまり、本校では木曜日に二十五分、その他の日は十五分の礼拝をもっている。宗教週間中は二十五分ずつ。

これは私個人の勝手な感想であるが、同志社が大きくなればなる程、宗教強調週間のような考えはなくし、それこそ、いつもがそうでなければならぬ。もし高校生にせひとも聞かせたい話があるなら一時間をさいてでも聞かせるような努力が我々に欲しいし、そのような姿勢も学校に欲しい。宗教教育を基本と考えるのであるならば、その人とのふれ合いというのが、どんなに大切なものであるのか。より新鮮で感銘するものだと信じている。大切な人格教育をしなければならぬ。宗教週間というのも勝手なもので、それだけで終ってしまう危険性がある。それに宗教部という校務もこれも大変こわい。大学にも、他校にもあると思いますが、やはり今日の時代になると、何か最後の砦のような所になってしまっている。私は学校の機構を変えるまで考えているのではないのですが、キリスト教の看板をはずさないためにも何となく宗教部の存在があり、宗教的なことについてはすべてやる場所である。これでは、全生徒、全教職員がなすべきだという考え方から離れてしまう。もしそれが現にそうでないとするならば、宗教部のあり方がほんとうに同志社の最後の砦といった感のするところになってしまふ。我が同志社がこのように大きく、機構的にもしっかりしてくればなる程、宗教教育の場が失われつつあるようだ。しかし私はそれでもこの同志社の根本理念に立って、力強く打ち出していかなければならないと思う。

ここでやはり同志社は起源に戻って欲しい。私の申ししたことは今日では現実的ではないかも知れない。しかし現にキリスト教学校のK校を見せてもらいましたが、生徒のいきいきとしたものに圧倒されました。同じ高校生だろうか。その学校の宗教部の新聞を読ませていただきましたが、なかなかしっかりしたことを書いていました。まだ創立間もないようですが、人間を人間として目ざめさせるような自信を先生方は持っているように思いました。キリスト教主義学校ならそれぐらいの自信と勇気を持って当たるべきだと痛感しました。同志社もかつてはその信念のもとにそのような教育をしていたのだろうか……。

キリスト教主義学校にいる我々は何か遠慮をしているのではなからうか。あるいは、その教育に自信が持てなくなったのだろうか。それを根本的に直すには我々の信仰とともに、物理的には、大ざっぱな方法では駄目だということ、学校全体、つまり教師たちの熱

意の問題ではなからうか。

当たり前前のごことをことさらに書いてしまった感じがします。

(高等学校教諭・音楽)

私は教育をこう考える

野 崎 正 明



同志社に職を奉じて十年余、標榜するキリスト教主義教育の実践という点において、私にはどれだけのことができたであろうか、私

は果たしてそれにふさわしい人間であり得るのだろうか、今までに何度も自問してみても、自分の力の足りなさをしみじみと感じると

同時に、あれこれと絶えず思い惑うのである。

教育者として二度目の勤め先に同志社を選んだとき、キリスト教主義の教育を行う学校を、学生、教師どちらの立場からも、ほとんど何も知っていなかった。はじめての学校訪問で面接の時も、自分が受洗者であることを言っただけに全然気がつかなかったくらいである。不幸な戦争が間にはさまったということもあって、教会へ行くことからしばらく遠ざかっていた私に、キリスト者としての道が再び通じることになって、ひとまずほっとしたという気持ちであった。他校からの勧めを断って自ら望み身を投じる決心をした同志社で、キリスト教主義教育をどのようにしたらよいか、一抹の不安を抱きながら出発した。

やがて学内にクリスチャンが思いのほか少ないことに気がつくにつれて、これは大変なことになったと責任の重大さをひしひしと感じさせられたが、また同時に新しい職場での希望と期待とが体に満ちてくるような気さえた。しかし所詮は自分の信仰の浅薄さ、知識の貧弱さとは蔽うべくもなく、これがいまだに私を悩ましつづけている。そしてまた現状が神のみ名によって建てられたと誇るに足る学園の姿であろうかと思うにつけ、日夜私の心をさいなむのである。

私はこの稿をしたためるにあたって、いささかためらわざるを得ない。というのは、自分の教育している生徒の実情を述べるのに差障りがあるのではないかという虞れがあるからである。しかしいつまでもきれいなごとのみを言っておれない。今や同志社教育の危機が迫っているのではなからうか。私は思い切って、だがいくらか速

慮しながら、ぶちまけてみたいと思う。自分の告白であり反省でもあると思うからである。もとより生徒全部のことではなく、ほんの一部の心なき人たちのことを述べようとするものである。たとえ一部少数であっても、滅びにいたる門は大きく、その道は広いのだから。

まず残念でならないのは、学園にキリスト教精神が薄れてしまっているのではないかということである。これを端的に象徴するのが学校礼拝の姿である。集まりの悪いこと、これは上級生になるに従ってその傾向がはなはだしくなる。出欠をとったり出席カードの提出をもとめたりしないところに、むしろキリスト教精神のあらわれを私は感じているのだが、一部の生徒はそれを逆手にとって、自主礼拝であるべきだから信仰を強要するものでも、礼拝への出席を強制するものでもなく、出席したい者が出席すればよいのだと勝手に解釈している。中には自主礼拝などというからいけないので、正課同様出欠をはっきりとつららよという生徒も一部にはある。信仰の自由をたてにあって、礼拝をサボルことを正当化(？)するため、ここ数年礼拝問題として学校当局に出席の自由を認めよと迫る動きはなかなか根強い。

礼拝に対する考え方に對して教師と生徒とは対立的な立場に立たされている。新島精神の原点に帰れなどというスローガンが掲げられたり、先生方の奨励の訓話に對して、個人的な考え方や体験談など聞くよりも、もっとキリスト教らしい礼拝にするため、その方面の専門家の宗教や信仰の講話を希望しているのだと、一応もっともらしいことがよく言われるが、それはどうも単なる脱礼拝のための

カムフラージュに過ぎないのでなかるうか。現に牧師の方々の説教の時の方が、かえって極めて騒がしいことが多いのを見て、口実としか思えない節が多い。一般の朝礼的なものと、宗教的な礼拝との二つにはつきり分けて、後者は出席希望者の自由にしては、という意見もあるが、いろいろむづかしい問題を含んでいるようにも思えるので、さらによく研究してみたいと思っている。

りっぱなチャペルに肅然とした出席者で一ぱいの礼拝を私は夢みている。しかしそれよりも内容の充実した礼拝こそが本当の礼拝ではないだろうか。チャペルのせまいことと設備の不十分なことが現状で、我々を悩ましていたが、今しばらくは我慢してはならないだろう。

大学へ無試験進学のパスポートを入手するために、高い授業料を払っているのだから、そのパスポートがいざという時、とにかくとればよいので、新島精神もキリスト教主義教育もわれ関せずという考え方が、あまりにもひろがり過ぎていのではないだろうか。自分の嫌いな、やりたくないまたは苦手な教科はいい加減にしておいて、たまたま点数かせぎをする者もいるし、それはまだよい方で、勉強はしたくない、のんびり遊んで楽をして、大学へ入りたいという身勝手な者もある。私たち教師は一人でも多くの教え子たちを大学へ送りたいのはいうまでもないが、勉学の意欲のない者まで、そうしなくてはならないのだろうか。私たちが彼らをそうさせたのか、彼らももう救い難しの状態になるまでに、何とか手が打てなかったか。悩みは果てしない。

礼拝が騒がしいのは、自分たちのおしゃべりに忙しくて、全然人

の話に耳を傾けようとしなからである。これはしつけの問題であると思う。人の意見や体験を聴くことによって、自分に得るものがあるはずである。私は思うのだが、徒らに時間を空費して何ともしないことだろう。第一に話しをされる人に対してエチケットを全然わきまえない田舎者と言われても致し方があるまい。これがひいては授業中の騒がしさと関連するようである。自分には理解できない（たいていは勉強不足のためが多いのだが）からといって、教科書もノートも出さず静かにしているのならばまだしも、騒いだり、雑談をしたり、トランプをしたりなどしているのは断じて許せない。名ざして注意すると、話しをしていたのは自分だけではないと反撥して、恰も自分だけ叱られたのが不当であるかのごとく言う。中には授業中黒板または教師に向けて、チョークや物を投げたりなどするものもたまにはあるが、振り向いて誰が投げたのかと大声で叱ると、決してやった者の名を明かさない。全く卑怯といおうか、つくづく情なくなってくることもある。このような雰囲気の中で毎日悪戦苦闘しているのである。私は、教育は忍耐であるという言葉をよく自らに言ってきた。学科の理解が遅いため、じつと我慢をしながら何度も教える忍耐ならば、むしろ教育者としての生甲斐を感じるのだが、荒廃した環境の中でこのように忍耐を強いられることは、とんでもない無駄をしているようにも思えてつらく苦しむ。

生徒をこのようにしてしまった原因は一体何なのか。私たちの学校のみではないかもしれないが、やはり真先に反省しなくてはならないのは教師ではあるまいか。生徒を甘やかしたからではないか、

教師の勉強不足のため生徒の望んでいることに応えられないのではなからうか。それと同時に、幼少の年からの家庭でのしつけ、社会一般の現状、このような社会にした政治に思い及ばざるを得ない。

まずできることからやらなくてはならない。

我々教師は覚悟を新たにし、また父兄方の協力を促したい。例えば喫煙問題で、家庭では煙草を吸うことを黙認しています、などという話しを聞くが、これでは学校でいくら悪癖を止めさせようとしてもどうにも仕方がない。

家庭との連絡を密接にして、協力してしつけをしなくては効果は上がらない。いなむしろこのようなしつけは家庭でやるべきことである。過保護は絶対にやめてほしい。自分の家の中でならば絶対しないような教室やその他の場所のひどいよごし方、あき瓶や紙屑の散らかしようは全くひどい。係のおばさんが紙屑を拾っているその頭上の窓からまた紙屑をふりまいている光景をしばしば見るが、これが名門校などと世間から言われている学校の姿であるとは情けない。教師はそれぞれ何かしなくてはと一生懸命であるが、なかなか改まらない。その他、他所からも芳ばしからぬ批判を受けるのは全く残念であるが、生徒の自覚に待つより致し方はないようである。

与えられた課程をまじめにやれば、大学に推薦入学できるだけの学力がつくはずである。勉強とクラブ活動との両立が心配なくできるのはこの特典があるからこそである。この恵まれた条件に甘え過ぎてはいけない。

以上私は少々言い過ぎたかもしれない。だがこれは前述のように

全部の人がそうではない。願わくは、ただ学園の荒廃が正常の状態に早くなってほしいと思うからこそ敢てぶちまけたのである。

教育で一番大切なことは人間のために教育するということである。国家の繁栄のためや、産業を発展させてGNP世界第何位などにするために教育があるのではない。人間を大切にすることを教育がゆがめられてはいないか。国家の繁栄なくして何の人間の幸福ぞや、という論理をふりかざしたがる人たちがさばっている限り、人間の幸福はないのではないか。人間の生命は地球より重いという言葉の意味をよく味わってみたい。一部特権階級の支配体制を維持するための教育であってはならないのだ。

人間愛を根幹とする世界を理想とする教育には、宗教が欠くべからざるものである。戦争の愚を何度も繰り返す人類にとって唯一の救いは宗教しかないであろう。

私はどんなにつらくても投げない決心である。粘り強くあらゆる困難と闘って同志社の栄光をとり戻したい。同志社を愛し、生徒を愛するがゆえに、私は祈りつづけたい。

(香里中・高教論・数学)



同志社における

キリスト教主義教育と「商高問題」

中村 幸久

商業高校では週一回四十五分間のチャペル・アワー、三年生を除く週一時間の「宗教」の授業、そのほか社内中高合同による年二回の宗教強調週間、またクリスマスマスマス礼拝をおこなっている。チャペル・アワーで問題となっていることは……と書き始めて感じるむなしさ。このむなしさはこれらの行事を企画、実施する時にも感じらる。キリスト教主義について、キリスト教主義教育について語るときに、いわゆる「商高問題」を抜きにして個々の行事やカリキュラムについてだけ語ることがいたたまれぬほどむなししいのである。

ここでいう「商高問題」とは、昨年七月の理事会における「商高は廃校する方向で」の決定と、同じく九月の理事会における「昭和四十八年度の生徒募集の停止」の決定、およびそれをめぐる諸問題をさしている。「宗教」の授業や、チャペル・アワーがおろそかにされているわけではないし、前述のとおりおこなわれている。キリスト教主義教育が聖書を根底とするものである限り個々の人間の生

き方に常に係わっている。私は次のような生徒の声を教師として聞き捨てることはできない。その現実を知っていたくため、その生徒の声をここにいくつか記録することとする。念のため断っておくが、「昭和四十八年度生徒募集停止」のため現在二、四年までの三年（三クラス）、八十余名の生徒数である。

（四年生のクラスで）「先生、わしもなあ、この学校のことや、最後にのこる今の二年生のことなんかまじめに考えたけど、もうやめや、勉強して自分だけ卒業できたらええわ。」

新入生が入ってこないことを知った時ある生徒は自嘲げみに言った。「先生、かねの力はどもならんなあ。物わかりのいい生徒だと喜んでいいのか。学校全体が地味ながら築きあげてきた何もものが音をたててくずれていく。この事態が与えた影響に背筋が寒くなる。「真理は、あなたがたに自由を得させるであろう」（ヨハネによる福音書八三三）この言葉がこの時どう係わるのか。

(生徒会・クラブで) 今年は三クラスでなんとか秋の行事もやった。「先生、来年どうしたらええのや」とぼやく。わずかに残ったあるクラブで「来年はこのクラブも試合でけんなあ、こんな学校いやになるわ」と投げやりに叫ぶ。「まあ、そう言わんとしっかりやれや」と言った教師は、自らの無責任な言葉に嫌になる。論理的にどう結びつくかは別にして、とにかく私は、商高生徒に対して、同志社がキリスト教主義の学校である、と言うことに恥かしさをおぼえる。そのことを強調して言えば二重に欺いているような気がする。これを断片的な一部の生徒の言葉だと言って看過できない。このような発言もないところにもっと無気味な問題があることを感じる。「小人数なら小人数なりの創意工夫で」と言う声もある。しかしたんに小人数、小規模ということ、新入生がもう入って来ない、三年後学校がなくなるといふことは事がらの本質がまったく異なる。また社会全般の流れの中で、たとえば学制改革等によって学校がなくなる、ことも本質的に異なる。

ここで私の立場をあきらかにしなければならぬ。私は同志社のキリスト教主義教育を守り、育てていきたい。同志社が社会的、道義的に、また法的に軽々しくキリスト教主義を捨てていくべきでないことは当然である。このような消極的な意味でなく、私は同志社に働く一キリスト者として、創立者の精神に沿いキリスト教主義をまっとうし、その教育にたずさわること使命感を感じているものである。だからこそ前項で述べた生徒の言葉に立往生する。ここで改めて聞きたい「商高廃校措置とキリスト教主義教育は無関係か、関係

ありとすればどのような関係があるか」。

無関係ではない、しかしかたりにつばな教育理念を持つていても現実の学校はそれだけでは成立しえない。教育理念と財政的裏付けの双方が必要であり、この二つがあつてはじめて学校が成立しうるとする、いわゆる「車の両輪論」がある。キリスト教主義の理念をかかげ(商業高校学則第一条) ているがゆえに、現在まで多大の経済的負担にもかかわらず今まで存続してきたのだという主張である。だが先ほど述べた生徒の声に対する答えとはならない。学校経営の事情説明とはなつても教育の場での答えとはならない。教育の場である限りそこに論理だけではなく人間が介在しなければならぬ。人間の論理、説明でなく、人間の答えが必要なのである。キリスト教主義教育の場であればこれは避けてはならないことであろう。この文章の冒頭に書いた「個々の人間の生き方」に係わることはこのことである。この責任は経営上の最終の場にある人たちをはじめ、現場の商高教職員、さらに、全同志社の教職員にも係わることと思う。この責任を避ける時、同志社内の一校、商高にとどまらずキリスト教主義教育をになう全同志社の退廃につながる。この原稿に求められた「将来への期待」もなくなる。

この責任を負う者の一人として、私は私自身への批判も含めて、次の諸点について「商高問題」に関する問いと提言をする。

一、前述のごとく商高は、生徒数八十余名(本年五月現在)の小さな学校である。数万名の学生・生徒を擁する同志社の中で最も少の学校である。小なるがゆえに軽んじられた、軽んじられて

いるのではないか。きわめて単純なこの疑問は重大である。いかに小人数の学校であっても、他校にくらべて施設らしい施設もなく、教室も大学と共用の学校であっても、そこで学ぶ生徒一人一人に対する教育的、人格的配慮はまったく同じ重要性を持つ。キリスト教主義教育をかかげる同志社にあってはならないことだが、小なるがゆえの軽視があった。そして今もある。この疑問は払拭できない。

二、商業高校が同志社の中で小さくとも特別な任務を負っていることへの理解が、どの程度、まだどれだけ広くなされていくか。ひと言で言えば「勤労青少年教育」である。多くの生徒の背後にあるものは恵まれない家庭環境、みせかけの繁栄社会の中での影のような零細企業の職場。私たちはその家庭、その職場を訪ねそのたびごとに微力ながらも自分たちがになり本校教育の意味の重要性を実感してきた。今回の問題についてその最終的決定をされ、その最終的責任を負われる方と、今述べた私たちの実感との間に決定的距離を感じる。もちろん今の同志社の組織としてはある程度の距離はやむをえないであろう。しかしこれも教育の場である限り、その距離をちぢめる可能な限りの努力が必要である。この点について私たちの努力の足りなさがあるかもしれないが、真しに、積極的にそれを聞き、私たちの実感するその現場に足を運ばれた方がおられたであろうか。私はここに同志社キリスト教主義の重大な欠落部分を見る。

三、商業高校が現在の状態にいたったことを「社会状況の変化」や「わが国の教育のあり方」(一九七二年九月、商業高等学校

の現状とその対策)のみに帰することなく同志社の問題として深く掘りおこす必要がある。問題は多岐にわたり複雑な影響もあることと考えられる。歴史的経過とともに、この問題の所在を勇氣をもってあきらかにすべきであろう。問題は一商業高校にあるのではないことはあきらかである。

四、これも単純な疑問である。一／三において述べたことを含めて「商高問題」が最終決定をされる時、その任にあたるすべての人によって十分な論議、検討がなされたか。生徒や私たち教員が今受けている、やり切れなさを汲みとられているなら、それは苦渋の論議であったはずである。「資料」が配布され簡単な説明がされ、数分後に決定……私の想像するこの場面がほんとうなら同志社とそのキリスト教主義の荒廃ぶりかものはや救いがたいところに来ているように思う。これが私の杞憂であれば幸いだし、またその任にあられた方にお詫びするものである。だが少なくとも私たちに提示されたものの範囲内ではその跡は読みとれない。同志社がキリスト教主義であるなら血の通ったものがあるはずだと思ふ。組織的に血を通わす場がないならその場をつくるべきであろう。

五、商業高校設立に際してかけられた理念、キリスト教主義にもとづく勤労青少年教育、私はこれが同志社キリスト教主義発現の場として、また対社会的にもいまだ重要な使命を持つものであると考える。その形態は固定的なものである必要はない。理念を生かした自由な発想の中で今後確実に、継続して究明していくべきである。今どこで、誰れがしているのか。

以上述べた疑問がうめられ、提言が地道にとりあげられていく時、同志社キリスト教主義教育の展望は開ける。逆に財政的に重荷になっていた商業高校を切り捨て、ことの重大性を無視し、道が開けたつもりでいたなら私学同志社はその命を失う。

「自分の命を救おうと思う者はそれを失い、わたしのために自分の命を失う者は、それを見いだすであろう。たとい人が全世界をもうけても、自分の命を損したら、なんの得になるうか。」(マタイによる福音書一六二五―二六)

(商業高等学校教諭・宗教・社会)

彰栄館の時計台を眺めつつ

久 永 省 一



宗教室は新立志館の三階にあり、この窓から彰栄館の時計台が手のとどきそうな距離に眺められる。九十年の星霜を経て、その煉瓦の茜色は古さびてはきているけれど、時計台は今もなお生きている。その鐘は礼拝の予鈴を打ち鳴らし、その時計の針は流れゆく時間を刻みつつつけてやまない。毎日、それを眺め、それを聞いている私には、鐘の音が何かを訴え、時計の針が何かを示唆しているよう

に思えてならない。

この彰栄館は同志社にとって、もっとも古い建物である(明治十六年定礎式)。それは京都においても、もっとも古い煉瓦建の建築物である。毎朝、礼拝が行われているチャペルは、それから二年おくれで建った。私ども、大正の終りから昭和の初めにかけて同中で学んだ者も、この二つの建物の中で、礼拝を行い、学業にはげん

だ。そして現在も、なおこの二つの建物の中で、礼拝を守り、仕事に就いているわけだが、いまそのことの幸せをじっくり味わっている。しかしまた一方、どこからともなく、それを打ち消すように、不安の影がしのびよるのを抑えることができない。

中学の生徒手帳に、本校の沿革として次のように記されている。

明治八年 同志社英学校設立

明治二十九年 同志社尋常中学校設立

明治三十二年 同志社中学校と改称

明治三十三年 同志社普通学校創立

大正五年 私立同志社中学と改称

昭和十八年 同志社中学校と改称

昭和二十二年 中等学校令による五年制中学校を廃し、新

に、学校教育法による三年生男女共学の同志社中学校を開く。

たしかに、新島先生は明治二十一年、亡くなられる二年前に、「同志社大学設立の旨意」を全国の新報雑誌に公表されたのだから、先生の悲願は大学の創立にあったことはいうまでもない。しかし先生の没後、大学設立は延びにのび、ようやく開校されたのが、それから二十年後の明治四十五年（大正元年）の五月であった。してみれば、同志社英学校の主流は、伝統のチャペルと彰栄館を礼拝と学業の場としてつづけた中学を流れてきたということが言えるのではなからうか。チャペルにかかっている新島先生、デビス先生、山本覚馬氏、それに数々の歴代の総長の画像が、それはそうなのだ、あるいは、それはそうあるべきだと語っているような気がする。し

かし、それはそうなのだと呼びかけられても、先にのべた不安はかくしきれない。

生徒手帳の中の「本校の使命と教育方針」の中に、「同志社の四大教育要綱である新島精神、国際主義、民主的伝統と、これらを一貫するキリスト教主義とは……」と認められている。しかし新島精神は他の三つのものと並列されるべきものであろうか。一貫するキリスト教主義というのなら、キリスト教主義が他の三つのもの土台になっているという意味にもとれる。よく新島精神とは何かと問われる。そしてそれについて、いろいろと論じ合われる。しかし私には、答えは簡単なように思われる。つまり新島精神とは、キリスト教精神なのだ信じているからである。というのは新島先生からキリスト教をとったら、あとに何が残るであろうか。国際主義とか、民主的伝統というのは、キリスト教主義を根茎にしたところの一本の花の花弁にすぎないのではなからうか。

先生の遺言の中に、よく引合に出される一条の言葉がある。

「同志社は隆なるに従い、機械的に流るる恐れあり。切に之を戒慎す可き事。」と。

何万という学生・生徒と、二千人に近い教職員へと、同志社が拡大、膨張してきてみれば、どのように濃縮された基本精神も、稀薄になってゆくことは当り前のことかもしれない。それを予想して、先生はこの遺言をされたにちがいない。しかし私ども同志社に勤める者には、新島精神と合致するキリスト教精神を堅持すること、その流れを絶やさないことが、当然のことながら、責務であると思ふ。そしてそのキリスト教精神を打ち出す場は、むしろ「礼拝」で

あろう。それは聖書の時間、いやすべての授業の時間、あるいはキャンプ、学園祭、その他いろいろの学校行事もふくまれるかもしれないが、しかしその主眼が「礼拝」にあることは、誰の眼からもみても、言えることだろう。この礼拝は、英学校開校以来、連綿として、百年近くもつづけられてきた。戦争中、軍部の圧迫によって、チャペルの新島先生の肖像をとりのけ、日の丸の国旗をかかげた一時期があった。その期間、礼拝を中止するのやむなきに至ったが、それでもクリスチャンの先生方は、彰栄館の二階の東南の部屋で祈祷会を守っていられた。ということは、同志社中学校においては、開校以来、九十八年の間、礼拝は途絶えることがなかったと言えるのである。

現在でも、毎朝、中学では礼拝を堅持している。ただ内容は以前とちがって、いくらか変化はしてきている。毎週一回、外来の牧師が説教をされる。今春から、毎月、一人の牧師がテーマを決めて、四回つづけて話をされることになった。たとえば九月は、平安教会の小野一郎牧師が「キリストの使徒達」と題して連続講演をされている。土曜日は讚美歌礼拝を行う。他の四日のうちの一回は、讚美歌、聖書、祈祷のうち、生活指導部や生徒部など、校務からの話がある。残りの三日は、校長や、宗教部員や、他のすべての先生方の話になっている。他のすべてと言えば、言いすぎになるが、ほとんどの先生方が話をしてくださっている。中には一月も前から、話す材料を暖め育てていられる先生もある。話をすることが気になつて、三日前頃から、寝つきが悪いと洩らす先生もある。そのような苦心談をきかされると、ほんとうに感謝にたえない。

それでも、先ほどのべた不安と心配は依然としてくすぶり、ひろがってくるのである。なぜなら私たちは新島先生の遺言の中の戒めを守っているのだろうかという懸念が湧き起こってくるからだ。いま手元に、大正九年頃の宗教部日誌がある。それに「大正日日新聞」の記事の切抜きがはってある。

『社会改良の爲め』

同志社の遊説

同志社では、四、五日の両日、南石教授引率の下、滋賀県大津、膳所、其他の地方に遊説を試みる筈だが、其主旨は宗教と社会改良に就ての宣伝をするものであると云う。(京都電話)

- 一、「国民的哲学建設の絶叫」……………柴田平治
 - 一、「善の力と悪の力」……………三谷公臣
 - 一、「帝国の改造とキリスト教主義の必要」……………中村道
 - 一、「未定」……………小原貫一
 - 一、「理想なき帝国の前途とキリスト教主義」……………田畑 忍
 - 一、「国民道德に対するキリスト教の貢献」……………南石教授
- おどろくことに、南石先生を除いたすべての人たちは同志社中学の生徒なのである。彼らは昼間、教会堂だけでなく、大津や膳所の路傍で讚美歌を歌い、説教をし、夜になると、信者の家に集い、感話をし、祈祷をし、床に就くのが午前二時頃であったという。その火のような信仰と行動に頭の下る思いがする。まさしくそれは「設立の旨意」にあるように、「生きて力あるキリスト教」であったのだらう。それにひきかえ、いま私どもがやっていることがいかに生ぬるいものであるかが痛感される。私らの力が足りないからとはい

え、このままでいいのか、そのこのままも、いつまでもこのままでありうるのかという不安がつきまとうのである。そこで私は自問自答してみる。「新島先生の時代とは、時代がちがうのだ。これが時代に即応した礼拝のあり方というものだ。現代の社会や学園の状況の中では、これが精いっぱいなのだ」と。ところが、そうは言っても、それが自分をつくらっているに過ぎないことを私の心は知っている。

今の教育は「みんなの教育」になってきた。すべてのことをみんなで考えるようになった。事を決めるのは、みんなによる投票である。そうなれば、みんなの中のクリスチャンの数が問題になってくるのは当然であろう。その数はみんなの中であって、あまりにも少ない。「同志社中学校の母」とも言われたグイン先生をはじめとして、何人ものクリスチャンの先生が去ってゆかれた。この数の不足はどここの学校にも当てはまることかもしれないけれど。

もう言っても遅いこともわからないが、大学の方で、もっと早い時期に、同志社の中高の先生を養成する機関をつくってほしかった。今、それへの後悔の思いがほぞを噛む。クリスチャンの、学問的にも優秀な先生の卵がそこで養成されておれば、どの学校でも迎えるのにためらいはしなかったと思われるからである。今からでは無理であろうか。困難であろうか。もう一つの務めは、本部か、しかるべきところで、全国に網をひろげて、学力優秀なクリスチャンを探して、中高に幹旋の労をとられることであろう。

も一つ付け加えたいことがある。これは中高のキリスト教教育と

一見、かかわり合いがないように見えて、実は大いに関係があると思われる事がらである。それは「同志社教会と学園教会」の問題である。同志社の多くの教職員からは、同志社教会は日本キリスト教団に属する一教会で、同志社とは関係のない、一般の教会並に見られている。しかし一方、学園紛争の頃は、一部の学生たちに、同志社教会は「学園教会」として扱われ、攻撃を受けた。同志社教会は新島先生によって、寺町丸太町上るの同志社発祥の地に、「第二公会」として発足した。そして明治、大正を経て、昭和に入り、戦後、栄光館に移るまでは、中学のチャペルが同志社教会であった。そして堀貞一牧師が全同志社の宗教主事であり、同志社教会の牧師であったのだから、同志社教会はどこまでも学園教会であったのである。この学園教会としての性格がいまほけてきているとしたら、もう一度、それを明確化してほしい。

もしそれが町の一般教会と同じ存在であるとしたら、同志社教会は直ちに栄光館から出てゆかねばならないし、ジュニア・チャーチ（中学生の教会学校）もチャペルから離れ、そこで終息してしまおうであろう。一方、もしそれが「学園教会」として確立されれば、そこから、またその周辺に、新島先生の言われる「生きて力あるキリスト教主義」が盛り上がりつつくるにちがいないと信じるからである。

(中学校教諭・英語)